

安永武人先生のこと

吉岡幸子

(女子中学・高等学校教諭)

一九八九年九月七日午前四時三十分、安永武人先生は逝去されました。享年七十歳と六ヵ月余、長寿時代の現代では、まだまだ元気で活躍になれるお年でしたのに。

先生に初めてお会いしたのは、一九五四年国文学専攻が二部に誕生する数ヵ月前でした。そしてやがて、その一期生として直接先生のご指導を受けることになったのです。それから三十数年、職場が近かったこともあって身近に先生に接し続けてきましたが、不肖の教え子であった私は、先生の幅広いご活躍について詳しくお聞きしようともせず、先生もまた、多くを語ろうとはなさいませんでした。

昨年十二月に開かれた「安永武人先生を偲ぶ会」に出席して、先生が多方面にわたってご活躍になり、それぞれの場で大きな足跡を残していらしたことを知りました。

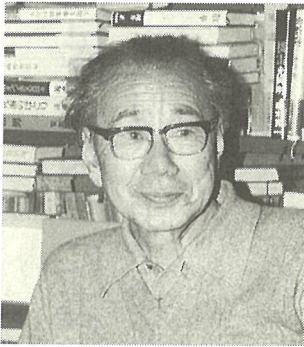
いつだったか、日本の大学が研究者を偏重し、教育者を軽視する傾向にあることを憂い、研究室外での実践活動の必要性を説いた文を読んだことがあります。先生の業績を考えると、こうした実践活動を無視することは出来ません。

厳しかった授業は勿論のこと、戦後間も多くの国文学園への協力を初めとして、京都文化団体連絡協議会会長、京都教育文化センターや母親大会へのかかわりなど、エネルギー豊富な先生の活躍を支えていたのは、第二次世界大戦を聖戦と信じ込まされて青春のさなかに散華した同世代の人々への鎮魂の思いと、二度とこの愚行を繰り返してはならないとの強い決意であったと推察します。そして、人を育てる教育の大切さを人一倍重視されていた先生は、多くの教え子を教育界に送り込まれ、一時流行した「でも、しか先生」という言葉には、強い不快感をお示しました。

同志社教職員組合の委員長として、教研集会を提案・実現されたのも、教育機関に働く者は、自分達の手で民主的な教育を創る努力をすべきだとの強い信念のなせるわざでした。今も学内諸学校の先生方の手で、地道に教研集会が行われているのを、先生はきつとお喜びのことでしょう。

妥協を知らぬ激しい人とうつる先生の行動の根幹にあったのは、平等主義、民主々義であり、真の優しさでした。

先生は一九八四年三月、六十五歳で定年退



職され同志社を去られました。これも大学院兼任教授は七十歳まで定年延長が出来るという制度を拒んでのご退職でした。後進に道を譲る潔さに加えて、同じ大学教授でありながら、定年延長の機会の無い一般教育科目担当の先生方との待遇の差異に、若い時から疑問を持ち続けておられた先生の、筋を通された姿だったのです。

先生の提唱で始まった文学研究会は、隔週の日曜夜に例会をしていましたが、先生はほとんど休まれることがないので、交互にさぼる学生にとっては時に煙たい存在でもありません。無報酬でよくまあ未熟な私達に何年もお付き合いくださったと、その熱意に頭のさがる思いです。これも黎明期の国文学専攻に、学生の自主的な良き組織を根付かせたいとの先生の配慮であったと今にして思います。

先生はまた達筆の人でもありました。「ようそんな下手な字書いてるなあ」と学生時代先生に呆れ顔されて、冷や汗をかいたのは私だけではないようです。今夏の日、先生の筆跡を求めて、洛北木野にある妙満寺を訪れました。二十数年前、文化史の秋山国三先生の御依頼で、先生の字のファンでいらしたその

奥様の墓碑に「秋山家」と揮毫なされたことを思い出したからです。全くの当てずっぽうで出かけたのに墓地入口から真つすぐ延びる通路の右手に、懐かしい先生の書体を見つけた時はあまりの幸運に息をのみました。漢字の横書きは難しいとおっしゃっていたその文字は、柔らかくのびやかで、剛直さには程遠いものでした。まさに先生の内に秘められた優しさの発露とも思える書体だったのです。

御退職後、『戦時下の文学』（未来社刊）の続編執筆に意欲を燃やしておられた矢先に、片方の視力を無くされ、やがて隻眼の読書にも慣れたとお聞きして、ぼっとしたのも束の間でした。新しい病魔は、既に体内に潜んでいたのです。ライフワークの集大成を目ざして、執筆に専念なさるはずだった先生の胸中の無念さと思うと、痛恨の極みです。

先生は、寺町鞍馬口下るの天寧寺に至道院武庵智仙居士として眠っておられますが、筆跡の残る妙満寺と共に、先生を偲ぶ大切な場所として、多くの教え子や知己の方々を知っていたのだと思います。

追悼 仲村研さん

藤田 貞一郎

(大学商学部教授)

人文科学研究所教授文学博士仲村研氏は、本年三月十三日薬石効なく遂に永眠した。その学問的活動は、日本中世社会経済史を中心に、広い視野と着実な研究方法をもって近世史にも及んでおり、今後とも当該分野において欠くべからざる業績として残ることは疑いない。その意味で、氏はまさに学問の生産者であった。また、その業績が、二十余年に及ぶ宿痾との戦いの中に生み出されたことを知る時、その精神力と学問的情熱に今もなお畏敬の念を覚えるのみである——業績の詳細については、本誌八五号の新刊紹介欄にゆずる。

私が、仲村研氏の警咳に接することになるのは一九六八年四月、お互いに三〇台の頃、年をとっているというのではないが、学生時代はすでに一昔前という時期である。気のおけぬ友を得るのは学生時代迄という通念に従うと、異例に属するといつてよい。が、いつか「研さん」、「貞さん」と互いに声を掛け合う仲となり、この春の長逝までの二〇余年間、各地の市町村史の編纂事業を含めて数多くの研究活動をもにすることになった。

その切掛けは互いに酒豪、それも陽性の酒飲みであったことにあるように思う。「研さ

ん」の持病は肝臓病であったが、知り会ったころは、まだ病魔に取りつかれていず、酒を楽しんでいた。私を「研さん」に引き合わせた安岡重明氏（商学部教授）と三人で、相国寺の庭、満開の桜の下で、一升壺を軽く平げたのが、そもその始まりであった。この時の飲み振りが印象に残ったのだと思う。その後一年程は相呼ぶ魂といったところでもあったろうか。が、間もなく病魔に襲われ、「研さん」は、好きな酒も飲めず、研究会の宴会などでは、ただひたすら世話役に甘んじる以外にないこととなった。皆が陽気に騒いでいるのを眺めているだけという境遇は、「研さん」にとつては拷問に等しい苦痛だったのでないかと思う。それでも、そうしたことを唆にも出さず、その雰囲気に合わせて自慢ののどを聴かせて呉れることが何度かあった。ことに小節をきかせた日本調の歌が得意であった。なかでも河内音頭は天下一品であった。

「研さん」は信義を重んじることに厚い人であった。職人芸的な一途さに生きる人でもあった。

「研さん」と、大阪府の泉南市史の編纂に携わったことがある。引つ張り込んだのは私



だが、一九七五年七月から一九八七年七月まで、この仕事は続いた。「研さん」が心よく参加して呉れたのは、泉南地域は信達荘の所在地であり、中世史の分野では「日根文書」とか「政基公旅引付」で有名な日根野荘の南に位置する地域であるということが、その学者としての好奇心を誘ったのだと思う。ところが、あにはからんや地域からは中世文書は全く発見できず、幕末から明治初年に作成された「日輪山清明寺代々記」三谷古記」がでてきただけであった。「研さんはこの二次史料ともいべき史料に史的価値を見出し、見事に生命を吹き込み中世の泉南地域の村々の姿を再現したのである。

中世史料新発見の夢は全く叶えられなかったにもかかわらず、「研さん」は毎月一回の調査・編集活動に、泉南市までかかさず足を運んで呉れたのである。

「研さん」は知的好奇心が旺盛であるばかりでなく、軽佻浮薄な流れに乗ることなく、自分の頭で着実に計画を練る人であった。その好奇心は数度にわたる独創的な海外旅行企画ともなっており、私も参加したスペイン・ポルトガル紀行のコースはこうであつ

た。マドリッド——アランフェス——トレド——グラナダ——コルドバ——セビリア——リスボン——コインブラ——ポルト——ピナド・カステロ——サンティアゴ・デ・コンポステーラ——ラ・コルーニア——オビエド——サンティジアーナ・デルマール——サラマンカ——マドリッド——バルセロナ、これを貸切りバスで訪れる。この旅で、スペインには、イスラムやフラメンコの世界とは異なる、キルトとバグパイプのケルトスペインがあることを私は初めて知った。このコースのことをスペインに長く滞在しその事情に詳しい、本学のT君に話したところ感心されたことを思い出す。私の気附く限り、現在も海外観光旅行商品のコースに、この対照性を意識した企画は見当たらない。

ガリシアとアストリアスのケルトスペインを知ったのは、全く「研さん」のお蔭であり、御礼の言葉を述べたい所だが、もはや幽明境を異にしてしまった。そのことが、今はただ悲しいのである。

故那須政男(俳号乙郎)先生 を偲んで

川 島 保

(女子中学・高等学校教諭)

同志社女子中・高等学校の教諭であった那須先生は、明治四十一年生れ京都葉学専門学校卒、同志社大学聴講生として尚学究されたと聞く。昭和十九年同志社高等女学部に奉職されて間もなく学徒勤労動員令が下り、女学生にも女子挺身隊勤労令が公布された。先生は早朝より生徒を引卒共々に軍用機の翼作りに専念されていたようである。与えられた余暇でさへ厳しい監視が下されたそんな時にも先生は、生徒達への自由を懇望された由、許されて十時より伴奏のない讚美歌で物悲しい思いをし乍らも毎日礼拝を守られたとか、戦地の兵隊さんへの神の恵を冒頭にしたお祈り、そして「つとめいそしめ花のうえの……あさ日てるまに、いそしめよ」という神への讚美は短時であつただけに実に尊い一時であつたと聞く、礼拝の度に渡り廊下の窓から此の景を眺めていた他の女子工員が、礼拝がめずらしいのか、戦争中なのに敵国の宗旨のお祈りをしているのが何とも不思議の様子で奇異な眼で見入っていたと当時の生徒が、同志社創立九十年記念誌に、もう二度と戦争が起らないことを願ひ、苦難の日々にあつて守り与えられた礼拝、短い乍らも教えられた授業

への感慨を感謝の念をもって述懐している。奉職されて間のなかつた先生の御苦労は大変だつたようである。戦中戦後は勿論今に至る迄の度重なる教育界の変動する中であつて尚且つ礼拝を欠かされることなく、

リラ咲くや双手に神の恩と愛

巢立鳥鳴けり教壇こそ墳墓

乙 郎

と、強靱に同志社の教師として新島先生の学校設立主意に従つてその信念を貫かれた。先生は、昭和四十九年三月をもって、永年勤続教頭職の重責を果されて定年退職された。

その間俳句の研究にも鬼神のごとく没頭、句集「ふるさと湖北」「現代俳句自注シリーズ」「俳人協会編那須乙郎集」「旅の残像」「遺句集旦暮抄」等があり俳誌向日葵を主宰、多くの門下生を育くみ、子弟の中から有為な俳人へ世に送られた。又句碑六基、

舟入の灯影に明くる春の雪

京都市中京区御池大橋西入本平庭園内

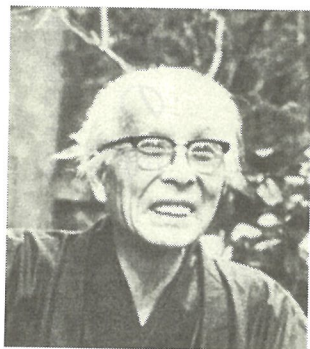
夕月は樹海の孤舟ほととぎす

京都市上京区御前通一条上ル那須淳男邸

山鳩やみねへかへりし萩の雨

京都市東山区高台寺庭園内

青筥満々と年来り去る



京都市右京区嵯峨野小倉山弘源寺句碑郡
首のべて急ぐ一鵜に沖の雷

京都府竹野郡網野町浜詰夕日ヶ浦海岸壁
新雪をふむさびしさにふりかへり

滋賀県今津町県立高島高等学校校庭

が建立されている。尚文化活動として、毎日新聞京都文芸欄俳句選者、俳人協会評議員、馬酔木同人、京都俳句作家協会顧問を経歴され昭和五十一年NHKテレビにて「近畿の秋花背吟行」に出演、昭和六十年年度京都市芸術文化協会賞受賞、昭和六十一年、京都市文化功労者賞の栄与を受けられている。私はこのような立派な先生に師事して三十三年、先生を失って早一年半偲ぶに当り感慨一入である。先生から宗教心を礎にした教育の信念を学ぶ、作句の真髄を通して森羅万象との融合を感じする奥義を手ほどかれ、旺盛な体力のみを自負していた私の五感に萬物を深く見る境地へと誘引された感動に重さね私が教育の仕事や作句の上で挫折しかけると、その心を見透かしたように「継続は力なり」「今の時を生かして用いなさい」と聖句を通して励まされたことが今もって忘れられない。先生の句風には常に、清新・誠実・清明の心源が底辺

に流れていて、ある時にはその心源が愛となり、ある時は生の孤独感を誘引し、ある時には萬物の中の一旅人としての自己を凝視生の根源「ふるさと」への郷愁を抒情詩で噴出され表現されている。先生は指導至言の中で、いかなる宗教であっても、宗教心はその人を強くし、句を強くする、何人であっても、何事に志す人であってもすべからず宗教心をもってほしいと強調されている。菜の花や遠まなざしの石仏、凍蝶をみ手にとどめしおんマリア、れもん一片愛したたらすごとしほる、子を抱く妻冬虹を光背に、野菊咲けこの青き空あるかざり、栗さげて父情おろかに子に急ぐ、主に捧ぐ百花にまじる葱坊主、くしくも私は六月花の日礼拝の後入院中の先生に当日捧げられた花をもつて御見舞したが、平成元年六月十六日「春暮れて命の果のあらしかな」の句を残し八二歳で永眠された。花の日の神に祈れど師は逝きぬ、惜しみて余りあり御哀悼の意を表するのみである。